

## 杭州に呉越墓石刻星図を訪ねて

佐竹真彰

中国の上海市から南西に約150km行ったところに、浙江省の省都である杭州市がある。杭州市は人口610万人の大都市で、西湖という湖を中心とした風光明媚な観光都市であって、高級中国茶である龍井茶や絹製品の産地としても名高い。西湖は春秋時代の美女「西施」にちなんでつけられたというだけあっていつ見ても美しい湖である。また、杭州市の南側には、海水が大きな波となって川を逆流することで世界的に有名な「銭塘江」という川もある。

この杭州市の中心地からわりと近いところに、「杭州碑林」なる博物館がある。石碑が林のように集まっているからこの名があるのであろう。「碑林」なる博物館は中国のちょっと大



きな街であれば必ずといってよいほどあって、近郊の石碑を一堂に集めて保存しているわけである。以前からこの「杭州碑林」の中に「星図」が有るという話を小耳にはさんでいた。私がいつも中国に出張するのは寧波市である。上海の南対岸にあたるため移動には飛行機を利用するので杭州は通らないのだが、うまくタイミング合えばなんとか行けそうだと以前から機会をうかがっていました。先に中国を訪れたときようやく杭州市に立ち寄る機会を得たので早速に見学に行ったのでここにご報告いたします。

念のため杭州を訪れたのは2002年11月であってSARSの病気が発見される前で有ったことを申し添えておきます。

### [ 杭州碑林への道順 ]

上海から杭州に行くには次のような交通手段があります。飛行機は週7便飛んでいて所要時間25分料金は260元(約3900円、1元=約15円で換算以下同)。電車だと上海市駅から特快電車(日本でいう特急列車)に乗車し約2時間75元(約1125円)、普通列車なら4時間45元(約675円)。特快を始め一日11本が運行されています。

高速バスは2時間(料金忘れましたが50元以下)15分毎に発車、路線バスは4時間22元(約330円)で各々杭州市に到着しますが、外人の観光客が移動する場合は切符の購入、乗り場探し、乗り方等大変ですので、観光ガイドさんの同行をお願いするのが得策です。



杭州市市街図

上海からは、現地旅行会社主催の杭州ツアーもあります。杭州碑林のようなマイナーな場所は観光ルートに入っていないので、個人的に出向かないと見る事が出来ません。

杭州市内の移動はタクシーを捕まえるのが手軽で安い(基本料4km10元(約150円)以降1km毎に2元)です。「杭州碑林(ハンチョーペイリン)」という所は結構マイナーなところで、市民に尋ねても知っている人はほとんどおりません。たぶんタクシーの運転手も「不知道(プーチーダオ)」(知らない)との返事が返ってくるでしょうから、とりあえず地図を取り出し観光名所である西湖十景のひとつである「柳浪聞鶯」を見つけその一筋東の「労働路」という道路に行くよう指示すると良いでしょう。



杭州碑林入り口(本当は裏口らしい)

労働路を歩いていると西側に「杭州碑林」という小さな看板が出ていて、その奥まった所に古びれた土塀と門があります。日本でいうと田舎町にある武家屋敷といった感でしょうか。右手に入場券売場があるのですが大変小さいのでうっかりすると見逃してしまいそうです。(この原稿執筆中に知ったのですが、どうやらここは裏口らしく他に



#### 銭元権の墓星図全景

立派な表口があるらしいです) 入場料は3元(約45円)だったと記憶しています。館内は寺院の境内を利用した感じで、お堂や回廊に石碑が所狭しと展示してあります。500点余りの石碑があり1500年間に及ぶ書の変遷を見ることが出来ます。館内を一巡見学したものの肝心の「星図」が見あたりません。何度探してもどうしても見つからないので、清掃作業をしていたおばさんに所在を尋ねてみました。でも言葉が通じないうえに外人だと知れると逆に逃げ出しそうな様子なので、無理に捕まえて筆談で「星図」の在処を尋ねます。ところが「星図」の漢字が通じないんですよ。そうでした中国では「星図」の図を「国構えに冬(漢字見つかりませんでした)」って書くんです。

おばさんがようやく理解してくださって案内された所は、館内の土塀のさらに一つ奥で、小さな門をくぐり抜けた所にある別棟でした。中に入ると馬鹿でかい石碑が壁一面を占拠したように立ててあり傍らに一回り小さな石碑が展示してありました。幾つかに割れてしまった大きな断片を繋ぎ合わせて展示してあり、粉碎して現存しない箇所もありました。当初は傍らに立っている方の石碑も繋げない部分が展示してあるのかと思いましたが、よくよく見ると別個のもので石刻星図が2枚であることが分かりました。

説明板は、全く簡単なもので、後ほど学芸員に研究資料や図板等が刊行されていないか



聞きましたが、回答はすべて「没有(メイヨー)」「(ないよ)でした。

説明板によると、この石刻星図は、銭元瓘という人の墓石であると記されています。

「銭元瓘、公元887～941年、五代呉越の国第2代国王。杭州玉皇山麓に墓が有る。1965年に発掘した。墓の頂上に星図の蓋が有った。北極を中心に3本の同心円が描かれ、内円は49.5cmで北斗等が描かれており、2つ目の円が119.5cmで28宿が、3つ目の円は二重で189.5cmである。刻まれている星宿は32(付座)13で現存する星数は183である。この図は世界で最も早い(古い)石刻星図である」(中国語直訳、一部不明な点を略したことをお許しいただきたい)

呉漢月の墓星図の一部 なるほど、呉越の国の国王の墓で、石室の天井に星宿図が描かれており、その天井石をここに保存している訳である。「キトラ古墳の星



斗(いて座)付近(銭元瓘墓星図)



参（オリオン座）付近（銭元瓘墓星図）

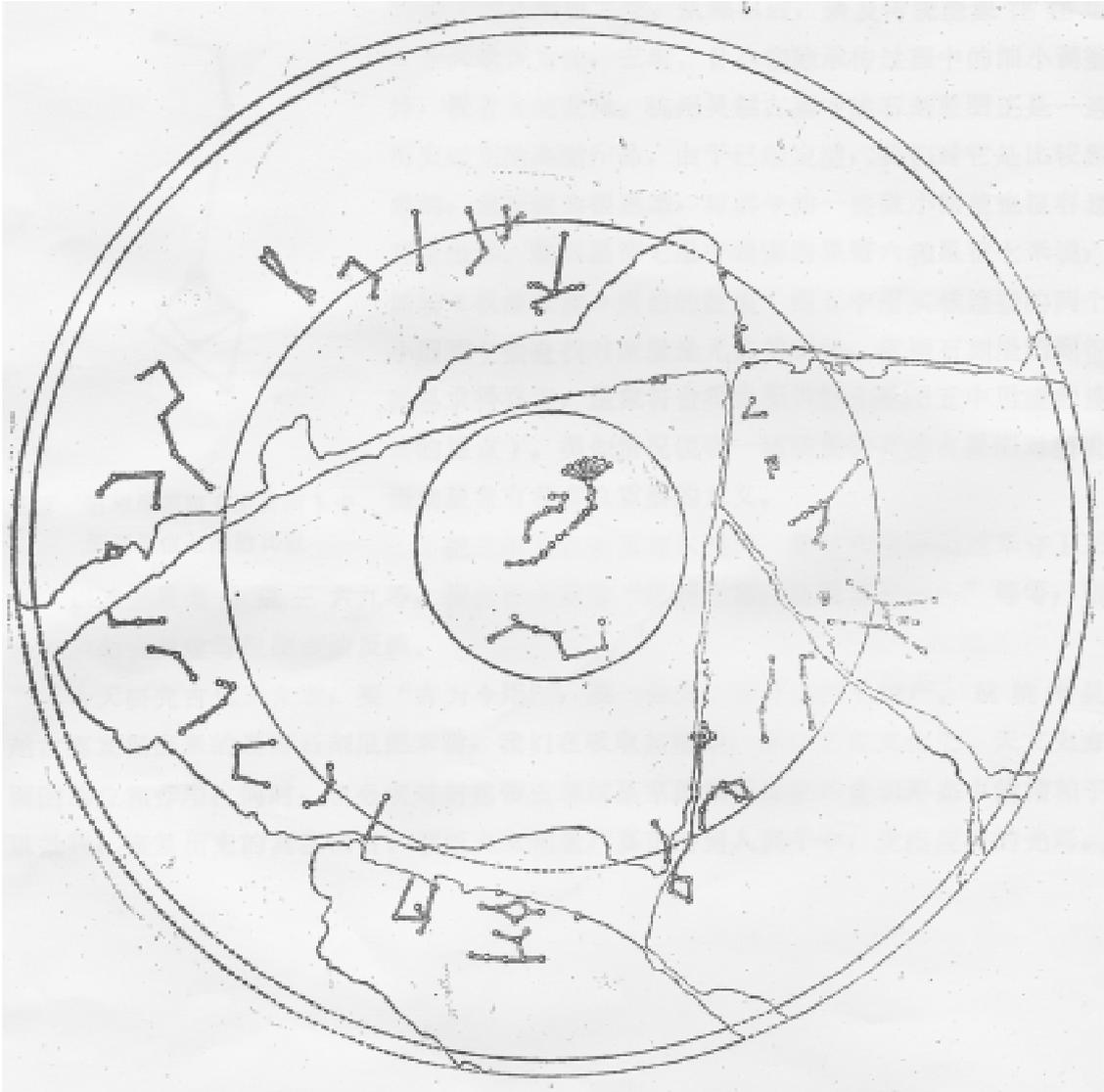
宿図みたいなもんかなあ。年代的には淳祐天文図よりずいぶんと遡るんだなあ」と感じたものの現地で理解できたのはここまでであった。

帰国後、手元にある中国の天文資料を調べてみたところ、1点だけこの星図についての論文が見つかりました。伊世同氏（北京天文台）がまとめられた「杭州呉越墓石刻星図」によると次のように記されています。

1958年冬、五代呉越の一連の墓を調査した、埋葬者は銭元瓘の次妃「呉漢月」であった。952年没。

1965年夏、杭州玉皇山の下にある五代呉越の国王銭元瓘の墓を発掘した。在位10年で941年に没した。

両方の墓の頂部（天井）には石刻星象図があった。銭元瓘の墓の石板の大きさは、長さ4.71尺、幅2.66尺、暑さは0.31尺で石板の側面には「范扇、童甲」の4字ありこれは石工人の名前であろう。原石は精密な加工がされている。星象の位置は相当に正確だ。銭元瓘の星図の質は一段と高い。星の数多数なり。これは世界で最も古い石刻星図で、蘇州天文図（南宋淳祐天文図・1247年）より300年早い。また星図の大きさは南宋淳祐天文図の直径より大きく面積はおよそ4倍である。中国内外で発見された墓室星図と比較して、天文学的に大変貴重な資料である。



五代呉越銭元瓘墓石刻星象図掌本

星の間は線で結んである。銭元瓘の墓は二重線、呉漢月の墓は単線である。星図は4周円で、装飾等は無く簡明素朴である。

図中央は極の星座、その周囲は28宿、総星数は次の通りである。

銭元瓘墓	星座32、(付座) 13、	星数218、	欠星35、	現存星数183
呉漢月墓	星座30、(付座) 9、	星数189、	欠星11、	現存星数178

真中の円は直径51.1cm、この中には周極星が描かれている。内規である。  
二つ目の円は直径123.1cmで、28宿が描かれている。赤道である。

三つ目の円は二重線で直径195.7cmである。外規である。この星図の観測地点から見える地平線である。

これらから、この星図の観測地点は、北緯37度である、杭州市は北緯30度なので、杭州以外で観測されたことになる。

当時北緯37度が最重要観測候補地点である。北緯34～35度の間には「開封」「洛陽」「西安」などの都市がありこれらも重要な候補である。

この星図の観測年代は、およそ唐開元年間(713～714年)である。

とある。先の説明板と円のサイズが違うのは気になるところだが、どちらが正しいかは不明である。さらに詳しく知りたい人は下記の参考文献を参照されたい。

【参考文献】

杭州呉越墓石刻星図 伊世同著 中国古代天文文物総集 252P 1989年文物出版社(中国語)

【注釈】五代は中国の時代である五代十国(907～979)、この時代15の国があり呉越(907～978)はその中の一つの国名である。公元とは西暦のことである。



呉漢月墓星図 少々見にくい小さな星と結ぶ単線のみえる。中央やや下が斗付近